

展覧会のご案内：プレスリリース

Heavy Light : Recent Photography and Video from Japan

2008年5月16日—9月7日

国際写真センター (ICP)

International Center of Photography
1133 Avenue of the Americas, at 43rd St. New York, NY 10036

「Heavy Light: Recent Photography and Video from Japan」展は、近年の日本のアートと現代文化の動向を反映した、写真とビデオ作品を紹介する大規模な展覧会です。本展覧会に出品される作品は、1990年代半ば以降、日本にもたらされたさまざまな変化にたいする多様な反応を表しています。

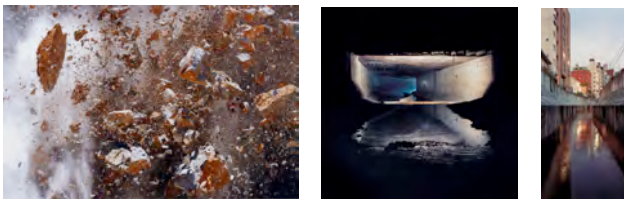
「Heavy Light」展と展覧会に併せて刊行されるカタログは、現代日本における文化の展開に対して新鮮で刺激的な洞察を加えるものとなるでしょう。参加アーティストは、会田誠、畠山直哉、鍛冶谷直記、鬼海弘雄、小松原緑、檜橋朝子、小沢剛、澤田知子、鈴木理策、やなぎみわ、ヤノベケンジ、吉永マサユキ、そして中川幸夫の13名です。これらのアーティストのうちのおよそ半数が、アメリカでは初めての展覧会となります。この展覧会を通して、写真を用いて作品を制作するアーティストたちの強い想像力と独創性が明らかにされることでしょう。

本展覧会では、次の4つのテーマに焦点をあわせます。「世界の表面」、「伝統の変容」、「コスチュームと自己顕示」そして「文化的アイコンとしての子ども」です。これらのテーマをととして本展覧会は、現在日本で活躍するアーティストたちによる優れた、そして独創的な作品だけではなく、21世紀における日本文化の新しい多様性をも紹介します。

1, 世界の表面

畠山直哉 (1958-)

『ライム・ワークス』を通して、畠山直哉は人間がいかに自然を消費してきたかということを洞察しています。石灰鉱山の発破をとらえたドラマティックな写真は、石灰岩の採掘、石灰岩をセメントに加工する工場の写真にいたる過程に含まれるものです。都市の風景をとらえた写真は、セメントが現代日本の環境を作り出してきたことをあらわにしています。



檜橋朝子 (1959-)

「half awake and half asleep in the water」で、檜橋は海岸側から波間日本の風景や建造物を撮影しています。彼女の写真の中で、海は時には穏やかで時には荒れ狂う力を持つものとして捉えられています。



2. 伝統の変容

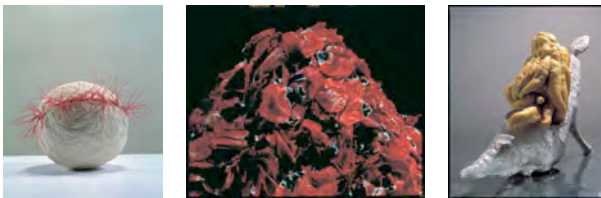
鈴木理策 (1963-)

鈴木理策は、映画のような流れを伴って展開する本としての形式を備えたプロジェクトを手がけています。本展覧会には『熊野』から選ばれた20点の写真が展示されます。この作品の中で、彼は生活と仕事の拠点とする東京から、冬に火祭りが行われる故郷の熊野への旅の軌跡を辿っています。



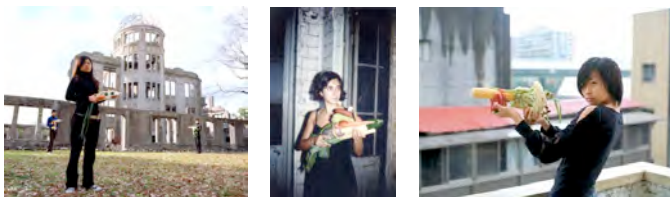
中川幸夫 (1918-)

1950年代以降、中川幸夫は日本で最も前縁的な生け花作家として知られています。彼が自らの生け花を撮影した写真は、洗練、エロティシズム、暴力性など様々な雰囲気を湛えています。



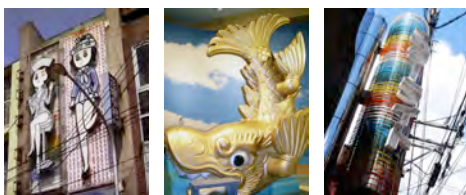
小沢剛(1965-)

小沢剛は、日常生活の素材やシチュエーションを用いて、機知に富んだ立体作品や写真、インスタレーションを制作しています。本展覧会では「Vegetable Weapon」のシリーズが展示されます。



鍛冶谷直記 (1970-)

鍛冶谷直記は、デジタルカメラを使ってストリート写真を撮影しています。本展覧会では、日本の街中の風景を捉えた大型のポップな色調の作品が展示されます。



3、コスチュームと自己顕示

鬼海弘雄 (1945-)

鬼海弘雄は、30年以上にもわたって東京・浅草にある有名な浅草寺で印象深いポートレート写真を撮影してきました。



吉永マサユキ (1964-)

東京に拠点を置く吉永マサユキは、ゴスロリ・ファッションの若者や、暴走族の若者など、日本の様々なサブカルチャーのグループを撮影しています。



小松原緑 (1965-)

「サンクチュアリ」で、小松原は架空の男子校を舞台に繰り広げられる物語を題材にしています。それぞれのキャラクターの間の感情的な関係やエロティックな関係が描き出されています。



澤田知子(1977-)

澤田知子は、現代日本の中の個人と集団との間の緊張関係を探求しています。本展覧会では、「School Days」の大型写真が展示されます。



4、アイコンとしての子供

ヤノベケンジ (1965-)

ヤノベケンジは、子供の頃に熱中したマンガやアニメ、SF映画に基づいて大掛かりな立体作品やインスタレーション作品を手がけています。本展覧会に出品されるインスタレーション作品では、トラヤンという人形が、危機にさらされる世界でいかに生き延びるかを教えています。



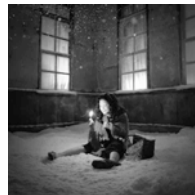
会田誠 (1965-)

会田誠は、日本の文化的な態度をグロテスクなまでに誇張した作品を製作しています。本展覧会では、子供のような顔で飾り立てられた盆栽の立体作品と写真作品が展示されます。



やなぎみわ (1967-)

やなぎみわは「Fairy Tale」において、有名なお伽話をダークでエロティックな方法で再解釈していし、夢のような、ある時は悪夢のような光景を作り出しています。少女たちは、その若狭と狡猾さを生かして、自分たちを苦しめる存在に対して勝利を収めるのです。



「Heavy Light」展は、ICPのキュレーターであるクリストファー・フィリップスと、インディペンデント・キュレーターであり京都造形芸術大学教授でもある福のり子が企画します。両者は、これまでも数々のアジアの現代美術をアメリカに紹介してきた、経験豊富なキュレーターです。ICPはアメリカの観客に、写真を基軸として、世界各地で展開する優れたヴィジュアル・カルチャー（視覚文化）を紹介してきましたが、本展覧会もその一環として位置づけられます。「過去と未来のはざまで：中国の新たな写真と映像」（2004年）、「Snap Judgment: アフリカ写真の新たな位置」（2005年）、「アッタ・キム：オン・エアー」（2006年）など、高い評価を得た展覧会に続き開催される「Heavy Light」展は、アジアの中でも、最も革新的な視覚文化を展開している日本の現代写真とビデオ作品に対して、新鮮で刺激的な洞察を加えることになるでしょう。

本展覧会は、2009年夏にロサンゼルス・カウンティ・ミュージアム(LACMA)のほかに、北米の2つの美術館を巡回します。

展覧会のカタログは、STEIDL社との協同により刊行され、出品作品の図版および、出品作家のインタビュー、優れた美術史家であるリンダ・ノックリンが特別に執筆したエッセイが掲載されます。

シンポジウムの開催

日時 5月17日（土） 午後1時～5時

会場 ICP

参加アーティスト 畠山直哉、ヤノベケンジ、会田誠、澤田知子、鬼海弘雄

モデレーター クリストファー・フィリップス 福のり子